

信仰を失う恐怖から、自由になる!



「お父さん、僕を捨ててに行くつもりなんだ…」、私は思った。夜明け前に父がまだ小学生だった私と兄妹を起こした。三人を車に乗せると、目的地も告げぬまま、車を発進させた。「どこへ行くの?」車中で何度尋ねても「エッサホイッサッ」と、謎の鼻歌ではぐらかす父。かたくなに口を割らない父に、サプライズにうきうきしていた私も、不安になってきた。まだ暗い道路とリピートされる不気味な歌は当時から妄想癖のひどかった私の不安心を一層あおった。「僕は捨てられるのかもしれない」「ふつと疑念がよぎった。思い込みだと、昨日「V」を見すぎたことが原因か?」とか勘ぐ

りだし、妄想は加速し、「どうか捨てないで、お利こうにするから」時間を巻き戻したくなるような気持ちになっていった。ほどなくして、「ついたぞ」、父は言った。そこは『餌屋』と書かれたフイッシングシヨップだった。釣り…。海釣り…。家族四人で仲良く海釣り…。思い返してみると「エッサホイッサッ」の歌は、父の謎解きの手がかりだったのだ。捨てられないということが判明した私は心底ほっとした。他愛のない出来事だ。が、その時の記憶を今でもしっかりと覚えていたのはやはり、「捨てられるかもしれない」という恐怖心は幼い私にとっていかに強かったかを示している。もちろん、父は、私を捨てる気などみじんもなかったろう。しかし、私には「捨てられる」という恐れが生じてしまったのだ。子供とはなんと純粹な存在だ。「あなたは橋の下にすてられてた」とか、「これ以上悪さすると山に捨てに行くぞ」とか平気という親は子供がどれだけシビア

な問題かがまるでわかっていない。「絶対に捨てられない」、それは子供が子供として暮らしていただける前提条件なのだ。親であるなら「私は捨てられるかもしれない」なんて考えを、一縷だつて与えぬよう努めるべきであろう。もし、自分が親に「捨てられる可能性がある」と思ったらいつもびくびくしながら暮らさなくてはいけなくなる。迷惑をかけてはいけない。言葉使いも慎重だ。おもちゃ屋に行つても、気軽にねだれない。お利巧な子供かもしれないが、良好な関係とも呼べない。これは、信仰でも同じ。私たちは、天の父を「パパ」と呼べる関係にありながら、どこかで「捨てられる（信仰を失う）恐怖」、「じこり」のようなものがあるのではないか。そもそも、無条件の愛など触れた経験がない私たちだ、孤児院からもらわれたばかりの養子のように、（父は捨てる気はなくても）「恐れ」がある。しかし、二つの真理はその恐れから自由にする。『私には神を捨てら

れない（神なしでは、生きられない）』こと。『神は、絶対に私を捨てない』こと。5歳の娘は、私に本気で怒ってくる。たまに手が出る、私ではなく娘の。体格差を顧みず果敢に挑んでくる。フライ級VSヘビー級どころではない。勝てるわけない。容赦なく殴ってくるのでたまにイラっとすることもあるが、同時にそれをうれしいと感じる自分がある。娘には、どれだけ私をフルボッコにしても、捨てられないという確信があるのだ。もちろん愛する娘を捨てるわけがない。ただただこつぴどく叱られるだけだ。こつぴどく叱った後は、ハグをしてやる。すると娘は謝ってきたりする。こんなことを繰り返しながら、娘は、自分をさらけ出しても捨てられなかったという安心感が芽生えるだろう。神に大胆に祈りをささげ、ありのままをさらけ出そう。神は私を捨てる気など毛頭ないのだ。